ベトナム見聞録

随　筆

岡　村　康　行*

Vietnam Memoir

Key Words：Hanoi, Ho Chi Minh, Confucian shrine, Education, Foods

私とベトナムとの繋がり

ベトナムと聞くと我々の世代は1960年代から70年代中頃にかけてのベトナム戦争が、若い世代は中国に取って代わった世界の工場が思い浮かぶと思います。私がベトナムと関わりを持つようになったのは、2003年、基礎工学研究科に英語特別コースが創設され、よくわからないまま秋入学のベトナム人留学生を受け入れた時からです。3年後、一人目の留学生が勤めていた会社の後輩を受け入れ、さらに大使館推薦の学部留学生を卒業研究生として指導しました。当時としてはベトナム人留学生を多く受けて入れていた研究室だったと思います。

初めて訪越したのは、2007年11月、基礎工学研究科主催の第2回日越国際学生交流セミナーを首都ハノイで開催するにあたり、研究科長の代理として開会の辞を述べた時でした。以来、セミナー関係で4回、日越学長会議の関係で1回、計5回ベトナムを訪れました。なお、日越国際学生交流セミナーについては、基礎工学研究科の多田博一教授が本誌の国際交流のページで詳細に報告されていますので参照してください。セミナーでの挨拶の準備のため、ベトナムについて色々調べ、日本とは奈良時代から交流があり、縁のある国だと思いました。特に、百人一首「天の原 ふりさけみれば春日なる 三笠の山にいでし月かも」の読み手とされる阿倍仲麻呂が遣唐留学生として唐に滞在した後、帰国を試みたものの暴風雨に遭って南方へ流され、唐に当時支配されていた安南の驩州（かんしゅう、現在のベトナム中部ヴィン）に漂着し、その後ベトナムの総督になったこと、あの句は結局帰国が叶わなかった阿倍仲麻呂の思いがこもっていることを知りました。

2007年のセミナーには最初に受け持った留学生のPham Viet Ha君も参加し、セミナーの合間を縫ってハノイ市内を案内してもらいました。タクシーを携帯電話で呼び出し、テキパキと案内してくれる姿は研究室では見たことがなく、彼の別の一面を見た気がしました。この時、最も印象に残った場所は文廟・国立大学（Temple of Literature & National University）です。文廟自体は、宋時代の1070年に建立されました。建設当時、中国の高級官僚の登用試験である科挙の制度がベトナムにもあり、現在でも境内には合格者の名と出身地が刻まれた石板が亀の背中に乗せて建物の中に置かれています。しかし現代のベトナム人は漢字を解せず、私が読んでその内容を説明したことを覚えています。また、1076

写真1　文廟にある科挙合格者を刻んだ石板の列。
それぞれの石板は亀の背中に乗せられており、
建物の中に置かれています。

* Yasuyuki OKAMURA
1950年9月生まれ
大阪大学大学院　基礎工学研究科　物理系専攻　博士課程修了（1978年）
現在、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構　イノベーションセンター
SIP推進室　室長　特別上席研究員
工学博士　光エレクトロニクス電磁波工学　大阪大学名誉教授
TEL：080-6165-6305
E-mail：dustenaz@agate.plala.or.jp

年にベトナム最初で最古の大学国士監が置かれた場所でもあります。なお、日本で学問の神様は菅原道真公ですが、ベトナムではCHU VAN ANが学問の神様にあたり、像がここにあります。そのため、卒業式が終わって卒業生が集まることで有名で、一度その機会に出会い、卒業生と一緒に写真を撮ったこともあります。その後も、ハノイを訪れた際には必ずここに立ち寄ることにしていました。

写真2　雨にも関わらず、文廟の「大拝の庭」にはアオザイを着た学生達が集まっていました。この日は丁度大学の卒業式があったとのこと。茶色い屋根の建物は孔子を祀っている大聖殿。孔子像が鎮座しています。

インフラ事情

ベトナムの交通事情の凄まじさは聞き及んでいましたが、実際、現地で自分の目で見たときには驚きました。発展途上の国はどこでも同じでしょうが、まず自転車、ついでオートバイ、そして車が普及していきます。ハノイを最初に訪れたときは、丁度オートバイが全土に行き渡ったところで、大学の教員もオートバイで通っていると聞きました。二人乗りはあたり前で、三人、ひどいときは四人が一台のオートバイに乗っているのには本当に驚きました。訪問の回数が増えるに従い、車が増え、しかも車がだんだん綺麗になっていくようでした。一番肝をつぶしたのは、3度目に訪問したおり、風光明媚なハロー湾クルーズに行ったときです。渋滞でなかなか進まなかった際、運転手は当たり前のように対向車線に移り、猛スピードで追い越して行ったのです。よく見るとどの車も隙を見つけては追い越して行っていました。また、ハノイには信号がほとんどなく、交通量が多くても、大きな道路でも通行人は皆平気で渡っているのが印象的でした。私も初めは戸惑いましたが、コツがわかれば渡れるようになり、帰国する頃には一人で渡れるようになっていました。最後にハノイを訪れた際には、率先して同行者と渡ったものです。

写真3　オートバイが行き交い、皆マスクをして運転していました。車も結構走っており、割と綺麗で新しい印象を受けました。

写真4　ハロー湾へ行く途中、対向車線を走っています。我々の前にも別の車が走っており、ほんの手前まで対向車が来ているのには、本当にびっくりしました。ちなみに車は右側通行です。

ベトナムのインフラにはいくつかの問題があります。まず思いつくのは電話線の配線です。次ページの写真は、最初にハノイを訪れたとき、ホテルの前で撮ったものです。電話線が鳥の巣のように入り組んで架線されており、混沌としています。数年後訪れた際に同じ場所で撮りましたが、全く変わっておらず、携帯電話の普及が望まれると思ったものです。現在ではハノイでの携帯電話の普及率は100%を超え、スマートフォンの普及率も30%であると聞い

写真5　鳥の巣みたいなハノイ市内の電話の架線。

ています。

また水道水が飲めないのは東南アジアの国では当たり前のようですが、ベトナムも御多分に漏れません。滞在時は歯磨きの際のうがいすらペットボトルの水を使っていました。最も懸念されることはヒ素が水道水に混入されていることで、このことは2011年開催しました第6回日越国際学生交流セミナーにおいて"Engineering Science for Green Innovation"の課題として取り上げました。学生たちが水道水にヒ素が含まれている現状分析、理由、そして除去方法などを熱心に討論していたことが思い出されます。

食・文字

ベトナム料理は日本人にはよく合うと思います。どの店で注文しても当たり外れがなく、しかも安いのが特徴です。ベトナムの通貨ドンは弱いのですぐに何万ドンという値段になってしまいますが、実際は数百円くらいで、有名な麺料理のフォーも百円から二百円くらいです。店によって特徴があるのは日本のうどんやそばと同じです。また春巻きが美味しく、揚げ春巻きや生春巻きなど種類が豊富です。学生さんの実家にお邪魔した折にいただいた生春巻きは格別に美味しく、各家庭に独自のレシピーが伝わっていると聞きました。この春巻きを魚油につけて食べるのが当地での食べ方です。もともと魚が苦手で敬遠していたのですが、一度試してからは病みつきになり、同行者に紹介するようにまでなりました。さらにベトナムはコーヒの産地でもあり、ブラジルについで世界第2位の生産量を誇るとのことです。もちろんコメの大産地でもあり、コメ文化が発達しています。ちなみにフォーの麺は米粉です。ハノイで飲んだ緑茶も美味しく、食を本当に楽しめる国だと思います。

写真6　本場とされるハノイのフォーは肉とネギだけのシンプルな麺料理。

ハノイの街中で看板を見るとアルファベットに似た文字が使われていることに気づかされます。古くは中国の属国であったため、先に述べたように漢字の使用が当然でしたが、1877年からはフランスの植民地として支配された、漢字からアルファベットに替わったのが実情であります。同時に他国に支配されてきたベトナムの歴史を思わざるをえませんし、もともと文字を持たない国の悲劇であるといえます。日本では奈良・平安時代に、ひらがな・カタカナが作られ、現在でも同じ文字が使用できることは幸せであると思います。ベトナム語は中国語と同じく声調言語であり、中国語の音韻が5種類であるのに対し、ベトナム語は6種類です。なかなか我々日本人には難しい発音であると聞きます。母音も多く、12もあります。そのため、ベトナム語を表記するために発明され、フランスの植民地化以降普及した声調入りアルファベット（ラテン文字）「クオック・グー（ベトナム語：Quốc ngữ / 國語）」が公用文字として唯一用いられており、ドイツ語のウムラウトのような記号が母音字についています。

多民族国家

訪越するまでは恥ずかしながらベトナムは単一民族で構成されていると勝手に思っていました。実際は多民族国家であり、公式に認められている民族は

54もあり、本当に多くの民族からなっている国家です。人名の多くは漢字由来ですので、「クオック・グー」ではわかりません。ところで、ベトナムにはグエンという名前が多く、3人に1人以上はグエンさんと呼ばれています。漢字では、阮文恵（Nguyễn Văn Huệ、グエン・ヴァン・フエ）と書き、ベトナム最後の王朝グエン朝の名でも有名です。

4度目の訪越で初めてホーチミンを訪れ、北と南は本当の意味で統一されているのだろうかと、疑問を持ちました。ベトナム戦争関係のニュースでよく聞いたサイゴンという名前がいたるところで使用されています。ホーチミンにある博物館では南ベトナムの紹介が中心で、北ベトナムのことはほんのしるし程度にしか紹介していませんでした。政治的には統一されていますが、経済の中心はホーチミンで、政治の中心はハノイということでしょうか。ハノイには建設されていなく、ホーチミンに建設されているハイテクパークの名前は、サイゴン・ハイテクパークであることからもそう思いました。なお、大学はハノイが中心であり、ホーチミンにある大学の教員は北を向いていると聞きます。首相直属の国家大学はハノイとホーチミンにありますが、ハノイの方が大きいです。ベトナムは長い歴史の中、中国の歴代王朝から繰り返し支配と侵略を受けています。紀元前111年から約1000年もの間、中国の歴代王朝はベトナムを支配下に置き、ベトナムにとって、中国からの独立は国家としてのアイデンティティーでもあると、話をしていても感じました。ベトナム人は政治的な話は普段しませんが、親密になるに従い、話すようになりました。中国と国境を接しており、

写真7　ホーチミンにあるサイゴン・ハイテクパーク研究所

支配されてきた歴史は長く、特に北は常に戦争をしてきており、中国に対する民族感情はよくないのではと思うことがあります。米国は、よくこれほどまでして耐えて戦ってきた国と戦争をしたものだと思いました。

教育・大学

初めてハノイを訪れた時のことです。丁度、お昼時でした。小学生と思われる子どもたちがカバンを持って歩いており、不思議に思いました。あとで尋ねるとベトナムの小学校では二部授業を採用し、午前、午後の4時間、異なったクラスが同じ教室を利用して授業しているとのことでした。そのため授業時間数が少なく、年間の総授業時間数は660時間と国際標準の年間総授業数の1015時間と比べ、極端に少ないです。二部授業が採用されている主な理由は、学校の不足や児童の集中（都市部）、子どもの農作業の手伝いが必要（農村部）なためとのことです。このシステムは、現在では農村地域や郊外などで採用されているだけで都市部では全日制に移行しているようです。もちろん、それぞれの国にはそれぞれの事情があることは理解できます。しかしベトナムからの留学生を受け入れる際、初等教育の現状まで考慮して、選考する必要性を痛感しました。

訪越では多くの大学を訪問する機会を得ました。ベトナムの大学は、国家大学、地方総合大学、専門大学、民立大学（私立大学）に分類されます。国家大学はベトナム国家大学ハノイ校（VNU）、ベトナム国家大学ホーチミン校（VNH）の二校あり、国家大学には自然科学大学、人文社会科学大学、外国語大学、工科大学、経済大学、教育大学などを配下に持ちます。最近、阪大も関与しています日越大学が設立されましたが、これもベトナム国家大学ハノイ校の配下にあります。そのためベトナムの大学と交流する際、国家大学の大学と他の国立大学の違いを知っておくことが重要です。University of Oxford や University of London には多くの College があるように英国の各都市の総合大学と事情がよく似ていると思います。学生数は多く、キャンパスの建物内の廊下で本を読んだり、リポートをパソコンで打ったりして、非常に勉強家であると感じました。ただ、半導体クリーンルームのような最新の設備を持つ大学はありません。サイゴン・ハイテクパーク

にある研究所には立派なクリーンルームがあり、最新の科学機器が置かれていましたが、日本から見て少し時代遅れであると感じました。阪大では研究室に一台はあるような最先端なMBE（分子線エピタキシー）装置が国全体で数台しかなく、科学技術については残念ながらまだ発展途上であり、今後伸びることを期待しています。日本は明治時代、福沢諭吉や西周らの努力により、西欧の言葉をそのまま使うのではなく、漢字を使って同じ意味を持つ新しい言葉（熟語）を創造したおかげで、日本語で科学技術を学べるようになりましたが、アジアの国では自国語で学べないのが現状です。ベトナムも例に漏れず、学生たちは英語の教科書を使っています。そういう意味では大学のグローバル化はベトナムの方が日本より進んでいるのかもしれません。ただ、自国のアイデンティティーがどう保たれるかが心配です。

写真8　廊下でレポートを読んだり書いたりし、パソコンをチェックして、勉学に意欲的です。

基礎工学研究科主催の日越国際学生交流セミナーが始まった2006年当時、ベトナムから日本への留学生は2,119名でしたが、2017年には61,671名とほぼ30倍にもなっています。日本へ留学する国の順位は、これまで中国、韓国、台湾の順でしたが、いつの間にかベトナムが2番目に、ネパールが3番目になり、今ではベトナムからの留学生数は中国からの留学生数に迫っています。これに気づいたのは2015年3月東洋大学で開催されたJapan　ASEAN Youth Conferenceで、まさかと思ったものでした。このとき、ベトナムからの留学生数が2位になったと指摘され、原因を考えたものです。よく言われるように働き手として来る学生も少なくなく、先にも述べたように初等教育では二部授業であることを十分考慮して、学生を引き受けることが大事かと思います。

終わりにあたり

私が訪越したのは、基礎工学研究科の評議員、研究科長、大阪大学理事・副学長を拝命していたときでした。貴重な経験をさせていただき、機会を与えてくださいました関係者各位にお礼を申し上げます。なお、ベトナムで見聞きした多くは、セミナーの合間での休憩時や昼食時の会話、留学生との普段の会話から得たものばかりです。ハノイまで飛行機を使えば5時間くらいでいけます。国際空港は、私が訪越した頃はゲートが5つしかなく小さくて古かったのですが、現在では新空港が旧空港の近くに建設され、稼働しています。日本人に似た国民性をもつ国ですので、皆さまもぜひ一度訪れれば気に入られると思います。

参考文献

1) 多田博一：第6回日越国際学生交流セミナーをおえて，生産と技術，第64巻，第1号，pp.102-104 (2012).
http://seisan.server-shared.com/641/641-102.pdf
2) 多田博一：基礎工ハノイオフィス，生産と技術，第65巻，第4号，pp.114-115 (2013).
http://seisan.server-shared.com/654/654-114.pdf
3) 独立行政法人　日本学生支援機構　外国人留学生在籍状況調査
https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/index.html